1985 年以降の 28 回すべてで、生まれる子がいちばん少ない月は 2 月だが、一日あたりに直すと 2 月がいちばん少ない年は 0 回——2 月の少なさの半分以上（0.512〜1.077・中央値 0.849）は月の日数の分で、季節の山は 1947〜1975 年の 1・2 月から 1980 年以降の 7〜10 月に移り、季節の振れ幅は 1955 年の 0.528 から 2006 年の 0.058 まで小さくなった [M110]

ならす前の指数 ＝ 暦の因子（月の日数）× 季節の指数（一日あたり） ── 分けるのは、暦で決まる分か、季節で決まる分か

山岸 勇輝（Yuuki YAMAGISHI）／ 独立研究者
ORCID 0009-0006-8587-3450
2026 年 9 月 ／ CC BY 4.0

要旨

厚生労働省の人口動態統計（令和6年 上巻 第4.2表 出生月別にみた年次別出生数及び出生率・1947〜2024 年の 36 回）で、生まれる月の季節の形を見た。月ごとの出生数には、月の日数（28〜31 日）の違いがそのまま入る。本稿はそれを「暦の分」と「季節の分」に分けた。新しい数学的定理も新しい法則も主張しない。

第一に、**1985 年以降の 28 回すべてで、日数をならす前の出生数がいちばん少ない月は 2 月だった。ところが一日あたりに直すと、2 月がいちばん少ない年は 0 回だった（1985 年以降の 2 月の季節の指数は 0.924〜1.006）**（第 4 節）。

第二に、これが本稿の芯である。**2 月の少なさを対数で「暦の分」と「季節の分」に分けると、1985 年以降の 28 回すべてで暦の分が半分以上（0.512〜1.077・中央値 0.849）だった。2 月は 28 日（うるう年 29 日）しかないので、暦の因子は 0.9205（うるう年 0.9508）で、日数だけで平均の 0.9205 倍に見える**（第 4 節）。

第三に、**季節の山（一日あたりでいちばん多い月）は、1947〜1975 年の 7 回すべてで 1 月か 2 月、1980 年以降の 29 回すべてで 7〜10 月だった**（第 5 節）。

第四に、**季節の振れ幅（季節の指数の最大 − 最小）は、1955 年の 0.528 が最大、2006 年の 0.058 が最小で、2021 年は 0.206（2000 年以降で最大・1 月が谷の 0.886）、2024 年は 0.162 だった**（第 5 節）。

第五に、**表の「年率に換算した月の率」から出した指数と、一日あたりに直した指数は、36 年とも 0.016 以内で合った**（第 3 節）。

第六に、分けるのは **暦で決まる分か、季節で決まる分か** である。「◯月は生まれる子が少ない」と聞いたら、その月の日数を合わせて確かめる。

射程注記：本稿は新しい数学的定理も新しい法則も主張しない——月別の出生数は公開の表にあり、本稿は月の日数で割り、対数で分けただけである。**本稿は公開の集計データの数の形を述べる構造的解釈であり、医学的な助言・診断・治療の推奨ではない。著者は医師ではない。個人の健康に関する判断は医師・医療機関に相談すること。査読を経ていないプレプリントである。 季節の山が移った理由や、2021 年の 1 月が低かった理由は、この表からは分けられず、論じない。生まれる月の良し悪しも言わない。** 「季節の分」は、日数を除いたあとに残る月ごとの差の全部で、その中身（何がそれを作っているか）は分けていない。1995 年までは 5 年おきの年だけを見た。**データについて**：人口動態統計（厚生労働省）は e-Stat から取得し、政府標準利用規約（第2.0版）に従って利用した。本稿の季節の指数・暦の因子・ならす前の指数・振れ幅・対数で分けた割合は、これを加工して作成した。本稿が加えるのは、**月ごとの出生数の差を、月の日数で決まる分と季節の分に分け、「2 月は少ない」の大半が暦の分であることを数で示したこと**である。

---

1. 記号と問い

- **ならす前の指数** N ＝ その月の出生数 ÷（年の出生数 ÷ 12）。1 が 12 等分した平均。
- **暦の因子** c ＝ 12 × その月の日数 ÷ その年の日数。日数だけで決まる見込み（31 日の月 1.0192・30 日の月 0.9863・2 月 0.9205・うるう年の 2 月 0.9508）。
- **季節の指数** I ＝（その月の出生数 ÷ その月の日数）÷（年の出生数 ÷ 年の日数）。一日あたりに直した値で、1 が年の平均。
- **N ＝ c × I** がちょうど成り立つ。対数では ln N ＝ ln c ＋ ln I。
- **振れ幅**：その年の季節の指数の最大 − 最小。

問い：生まれる月の差は、月の日数でどこまで説明され、どれだけが季節の分か。季節の形は年次でどう変わったか。

---

2. 下見と設計

正直に書く：設計は表を見てから決めた。

	内容
表	人口動態統計 令和6年 上巻 第4.2表 出生月別にみた年次別出生数及び出生率（人口千対）
下見で気づいたこと	近年は毎年 2 月の出生数がいちばん少ない。2 月は日数がいちばん少ない
下見で気づいたこと（2）	1950 年代は 1 月が飛び抜けて多く、近年は 7〜9 月がやや多い
下見で気づいたこと（3）	表の出生率は「年率に換算」されていて、月の日数の違いをならした値になっている（突き合わせに使える）
比べたもの	36 の年の季節の指数・振れ幅・山と谷の月、2 月の暦の分と季節の分、表の率との突き合わせ

---

3. データと確かめ

計算 3.1 取得した 1 本を SHA-256 で固定し、次を確かめた。

- 見出しは 総数・1月〜12月で、出生数と出生率の二つの塊が、同じ 36 の年（1947・1950〜1995 年の 5 年おき・2000〜2024 年の毎年）を持つ。
- 12 か月の和 ＝ 総数。1947 年だけ 4 少なく、注の「月不詳 4 」と合う。
- ならす前の指数 ＝ 暦の因子 × 季節の指数 がちょうど成り立つ。
- 表の「月の率 ÷ 年の率」と季節の指数の差は、36 年とも 0.016 以内（最大は 1975 年・率は小数 1 桁）。

---

4. 芯 ── 2 月の少なさを、暦の分と季節の分に分ける

計算 4.1 2 月の指数を対数で分ける

年	ならす前の指数	暦の因子	季節の指数	暦の分の割合
1955	1.089	0.9205	1.183	−0.970
1990	0.909	0.9205	0.987	0.867
2006	0.910	0.9205	0.988	0.877
2019	0.893	0.9205	0.970	0.730
2024	0.910	0.9508	0.957	0.532

観察 4.2：**1985 年以降の 28 回すべてで、ならす前の出生数がいちばん少ない月は 2 月だった。一日あたりに直すと、2 月がいちばん少ない年は 0 回で、2 月の季節の指数は 0.924〜1.006 だった。**

観察 4.3：**1985 年以降の 28 回とも、2 月の少なさ（対数）のうち暦の分は半分以上（0.512〜1.077・中央値 0.849）だった。** 2024 年はうるう年で 2 月が 29 日あり、暦の分は 0.532 と小さい。1955 年の 2 月は季節の指数が 1.183 と大きく、暦の分を打ち消して平均より多かった（暦の分の割合が負）。

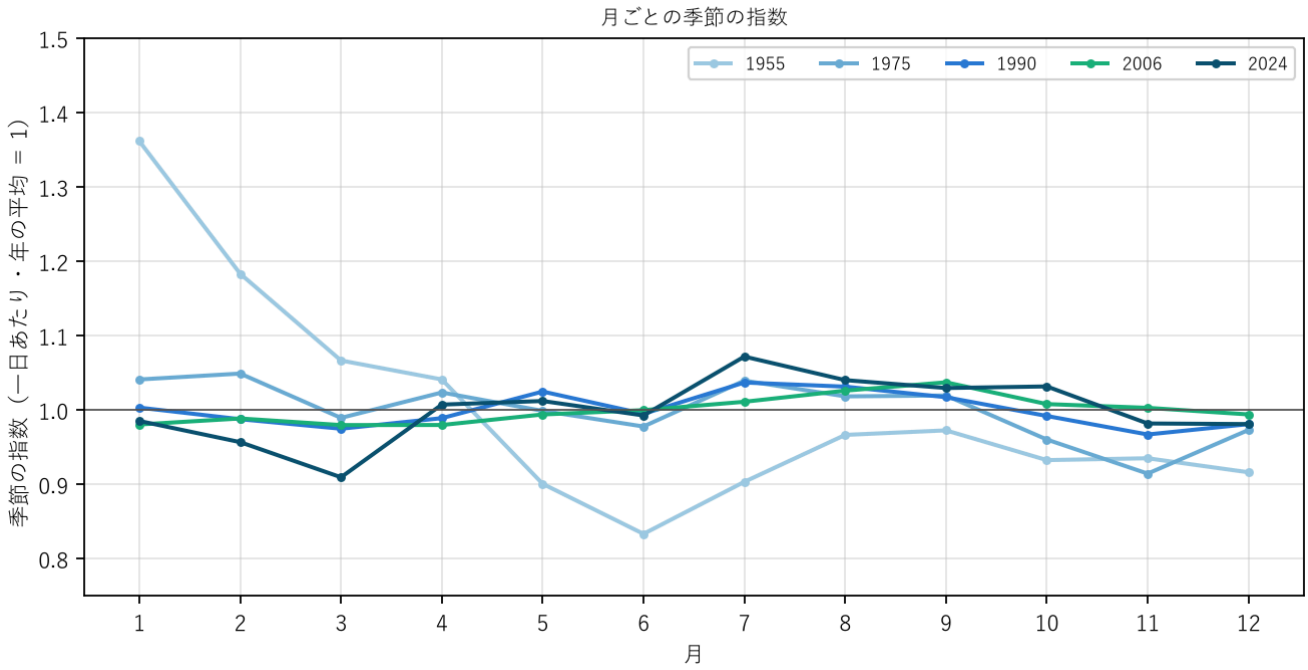


図1：月ごとの季節の指数（一日あたり・年の平均 = 1）。1955・1975・1990・2006・2024年。

---

5. 季節の形の移り変わり

計算 5.1 月ごとの季節の指数

月	1955	1990	2006	2024
1 月	1.361	1.003	0.980	0.985
2 月	1.183	0.987	0.988	0.957
3 月	1.066	0.975	0.980	0.909
4 月	1.041	0.989	0.980	1.007
5 月	0.901	1.025	0.994	1.012
6 月	0.833	0.995	1.000	0.992
7 月	0.903	1.037	1.011	1.072
8 月	0.966	1.031	1.026	1.040
9 月	0.972	1.017	1.037	1.029
10 月	0.932	0.992	1.008	1.032
11 月	0.935	0.967	1.003	0.982
12 月	0.916	0.981	0.994	0.981

計算 5.2 振れ幅と山・谷の月

年	振れ幅	季節の山	季節の谷	ならす前の谷
1947	0.477	1 月	12 月	12 月
1955	0.528	1 月	6 月	6 月
1965	0.180	2 月	6 月	6 月
1975	0.135	2 月	11 月	11 月
1980	0.127	9 月	11 月	11 月
1990	0.070	7 月	11 月	2 月
2006	0.058	9 月	3 月	2 月
2021	0.206	9 月	1 月	2 月
2024	0.162	7 月	3 月	2 月

観察 5.3：**季節の山は、1947〜1975 年の 7 回すべてで 1 月か 2 月、1980 年以降の 29 回すべてで 7〜10 月だった。振れ幅は 1955 年の 0.528 から小さくなり、2006 年の 0.058 が最小だった。** 2021 年は 1 月が谷（0.886）で振れ幅 0.206、2024 年は 0.162 だった。季節の山が移った理由は、この表からは分からない。

観察 5.4：季節の谷の月は年によって 3・4・5・11・12・1 月などに動くが、ならす前の谷は 1985 年以降ずっと 2 月だった。**近年の「2 月の少なさ」は、季節の形ではなく暦の形である。**

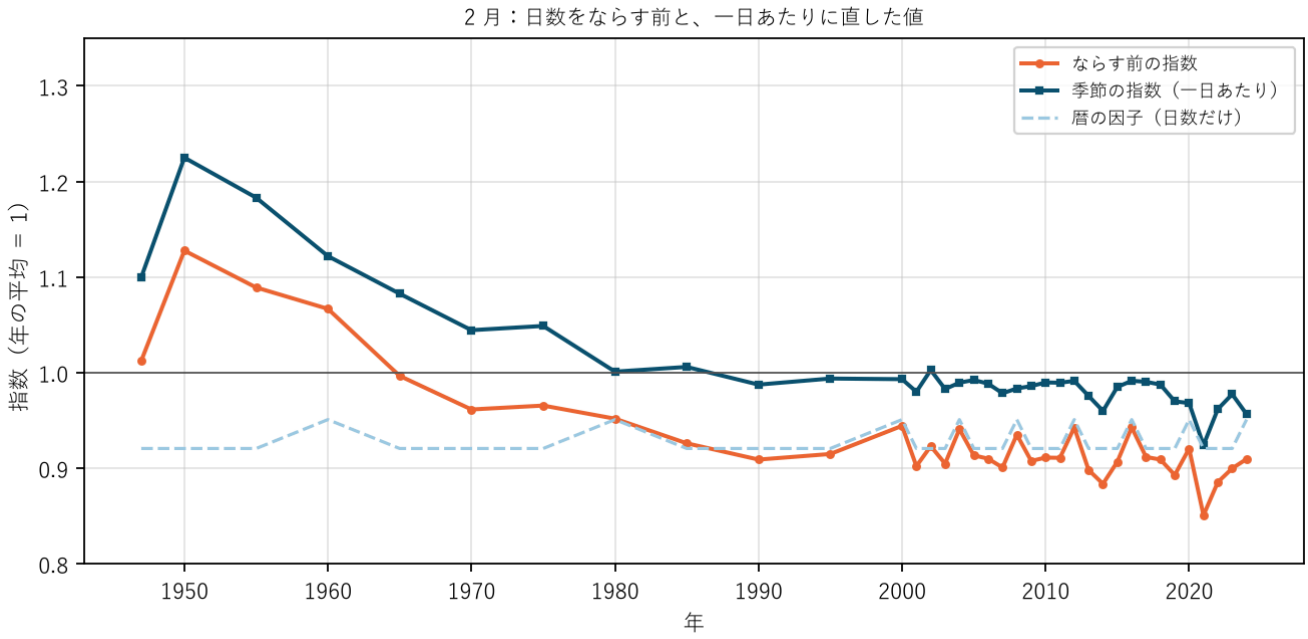


図2：2 月の指数。橙が日数をならす前、紺が一日あたりに直した季節の指数、水色の破線が暦の因子（うるう年は 0.9508）。

---

6. 限界

1. **季節の山が移った理由や、2021 年の 1 月が低かった理由は分けられず、論じない。生まれる月の良し悪しも言わない。**
2. 「季節の分」は、日数を除いたあとに残る月ごとの差の全部で、その中身は分けていない。
3. 1995 年までは 5 年おきの年だけで、その間の年は見ていない。
4. 2004・2006・2009〜2017 年は報告漏れの再集計後の値である（表の注 3）。

結び

1985 年以降、生まれる子がいちばん少ない月は毎年 2 月だった。一日あたりに直すと、2 月がいちばん少ない年は一度もない。2 月の少なさの半分以上は、2 月が 28 日しかないという暦の分だった。季節の山は 1 月から 7〜10 月へ移り、季節の振れ幅は大きく小さくなった。

分けるのは一つ——暦で決まる分か、季節で決まる分かである。

「◯月は生まれる子が少ない（多い）」と聞いたら、**その月の日数と、一日あたりに直した値を、合わせて確かめる。**

データと再現

データ	人口動態統計 令和6年 上巻 第4.2表 出生月別にみた年次別出生数及び出生率（人口千対）（厚生労働省・e-Stat）（2026-09-27 取得）
利用条件	e-Stat は政府標準利用規約（第2.0版）に準拠。本稿の季節の指数・暦の因子・ならす前の指数・振れ幅・対数で分けた割合は、これを加工して作成したもので、国が作成した数ではない
範囲	全国・1947〜2024 年の 36 回（1995 年までは 5 年おき）
検算	`検算/M110.py`（`--zu` で図も描く）。本文の数はすべて `検算/M110_output.txt` から取った
生データ	`data/` に取得したファイルと `SOURCES.md`（URL・取得日・SHA-256・利用条件・定義と計算の置き方）
図	`図/M110_zu1`・`図/M110_zu2`（png・svg・英語版）

参考文献

- 厚生労働省. 『人口動態統計 令和6年 確定数 上巻 出生 第4.2表 出生月別にみた年次別出生数及び出生率（人口千対）』. e-Stat（2026-09-27 閲覧）. https://www.e-stat.go.jp/